

## コメントへのリプライ (第二編者)

### A Reply to the Comments from the Second Editor

中山 智香子  
NAKAYAMA Chikako

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード  
連帯 女こども 非暴力

**Keywords**  
solidarity; women and children; non-violence

*Quadrante*, No.25 (2023), pp.31–33.

武内先生と共に編者をつとめさせていただきましたこの本は、連続セミナーの企画も一緒にさせていただいたご縁の続きで出来上がったものです。つまりこの本は連続セミナーの記録として構想されたのですが、実際にはほとんどの先生が新たに論考を書いてくださいました。各回のセミナーは全体で2時間弱のもので、たいていはお二人の登壇者がいらしたため、ご報告の時間がお一人あたり20分というとても短いものとなり、ゆっくりお話しをしていただく時間がほとんどありませんでした。それで、話しが足りなかった部分をあらためて論考として書いていただいたということかと思います。

セミナーの記録自体は本学のHP上で録画として今も見ていただくことができるのですが、この本は本として改めて作っていただけて良かったなあと思います。実は原稿をお願いしてから締切までがかなり短い時間となり、それでも皆様から原稿を出していただいて、良い仕上がりになったのではと、編者として率直に嬉しく感じております。

さて、本日はお二人の方からコメントをいただきました、ありがとうございました。通常は本を出しても、どんなふうに読まれたのか、なかなか直接うかがえる機会がないものと存じております。このような機会をいただき、感謝しております。ちなみに、この本を読んでもくださった方からのリアクションとして初めて公的にいただいたのは、『図書新聞』（2022年）6月11日号に掲載された書評でした。本日は外大出版会の小田原さんと相談いたしまして、会場にきていただいている皆さんにコピーを配らせていただきました。

さて、当方からのリプライをさせていただきますが、それだけでなく、本日は会場、またオンライン上にも何人かの執筆者の先生が来てくださっておりますので、（編者権限を発揮させていただきまして（笑））、ぜひ何か一声でもリアクションなどいただけたらありがたいです。

BLM運動の共同代表者の一人のアリシア・ガーザが自伝で、人から聞いた話を途中から自分の話にひきつけて変えてしまうのは連帯では

ないと言っている<sup>1</sup>ことをふまえると、日本にいる自分の身近な問題に引きつけてBLMの問題を置き換えることは、個人的には慎重にならざるをえませんでした。BLMが問題にしているのは、マイクロアグレッションとはかなり質の異なるものだからです。とは言いましても本書全体としては、問題を自分事として考えるというトーンが、結構強く出ております。特に自分事として日本という現場を考えるというテーマは、連続セミナーのうち、若い人たちに加わっていただいてラウンドテーブルのような形で進めた回でした。その声を今回、お若いコメンテーターの小美濃さんがご指摘くださったので、やはりそこが一番考えやすい手がかりなのだなあと、あらためて理解いたしました。ちなみにその回の連続セミナーで登壇されたのは、本日いらしてくださっている山内先生なので、山内先生にはぜひリプライをお願いしたく存じます。

それから、もう一つのポイントとして、小美濃さんご自身のご専門に関わるところですが、子どもたちが山谷から引き剥がされて公営住宅に連れて行かれたというご指摘がとても面白かったです。山谷の運動で男性労働者たちが、つまり日雇いとはいえ労働する権利があり報酬を得ることのできる人たちが、その労働の現場で勇ましく戦う陰で、何が起こっていたかを明らかにしてくださっているからです。それは実は、本書で当方が担当した第12章に少し書かせていただいたことにも関わります。つまり、男たちが運動で成果を上げたいとか、有名になりたいとか実際に有名になったとか、さまざまな結果を勝ち取っていく中で、その陰になるのはまずは女たちであり、そしてまた、そこにいた子どもたちなのだという事です。この点への意識の有無が、山谷の運動を含めた1960年代以前、あるいは1960年代前後の運動と、BLMの運

動や小美濃さんのご研究の違いなのだというところを、ご指摘いただいたコメントの含意と理解いたしました。今では、かつての運動の時代からジェネレーションが移って、当時山谷から引き剥がされてどこかへ移った子どもたちが、おそらく中年ぐらいの年齢、結構いい大人になっているということでしょうか。中年となった彼ら、彼女らが、山谷やBLMの運動をどのようにとらえ、考えているのか、逆にうかがってみたい気がいたしました。

なおジェネレーションをまたいだ子どもという視点については、本日いらしてくださっている大鳥先生の第6章がとても重要だと思います。また、ご指摘いただいた点からはやや逸れますが、子どもを引き剥がすということに関して、法律がどのように機能するのか、法律が子どもをどのように守るのかという、法的な枠組の問題があります。本書には法的な観点から書かれた章(第2章)があるのですが、BLMの運動の担い手と子どもと法律という観点は、必ずしも直接的な問題関心とはなっておりません。ですので、日本のことに引きつけて、であってもなくても、第2章を執筆された佐々木先生からリプライを一言をいただけたらありがたいです。

それから中野先生のコメントは、本当に素晴らしい、これを聞くだけでも今日来たかいがあったなあというぐらい素晴らしい、コメントというよりも一つのプレゼンテーションでした。ありがとうございました。

論点を明確にピックアップしてお話をいただいたので、そして荒先生、小田原先生もオンラインにいらしていただいているので、その部分はそれぞれの先生方からリプライをいただけたらと存じます。当方の章についてもご質問をいただきました。ありがとうございます。それは、要するに固有の生が重要で、できるだけ

<sup>1</sup>「誰かの痛みについて話を聞いても、その後で自分のことに話を戻してしまったら、それは連帯を表していることにはならない。」(本書第12章283頁で引用)

誰一人も取り残さないよう一人ひとりにフォーカスするという主旨をくみ取っていただいた上で、逆にそのことが、当事者のあまり楽ではない生を一人で引き受けなければならないという地点へ、当事者を追い込むのではないかという問いをいただいたものと理解いたしました。このジレンマをどうするのか、むしろ救われる縁のようなものが必要ではないかという指摘は、もちろんこの場で簡単に上手に答えることのできない、難しい課題かと存じます。

当方の担当章で書かせていただいたように、これはブラックの問題、BLM だけに限らず、マイノリティーと呼ばれる人たちが共通して抱えている問題で、やはり一人で耐えるのはとても耐え難く、しんどいというのは本当にそうだと思います。だからこそ、先ほど言及させていただいた共同代表のガーザも言う通り、簡単ではない連帯を模索するわけで、一人ひとりを考えることは、その模索と矛盾はしないのではと思います。ただしこれはもう少し言葉を選び、慎重に考えたいと思います。ご指摘ありがとうございます。

それとともに、先程小美濃さんのコメントに質問させていただいた論点、暴力の問題を回避するという論点に関して、あらためて少し触れさせていただきます。武内先生のリプライにもありましたが、非暴力を掲げた運動が暴力へと向かう衝動をいかにして制御するのか、どこまでが非暴力なのかという問題は、古くから20世紀後半以降の運動を経て現代に至るまで、ずっと問い続けられているもので、BLMはこの点をかなりうまく回避してやっていると思います。しかしその反面、別の問題が生じていることも見えてきます。

2020年の盛り上がり以降のBLM運動の動向を少し追っていると、共同代表や連帯者たちが運動の暴力化とは異なる方向性を求める中で、ある種の消費主義を偽装しながら、とい

うのは変な言い方かもしれませんが、例えばアメリカ内外に向けてBLMグッズを売って活動資金にするなどの戦略をとっていることが見えてきます。つまり資本主義を否定したり壊したりするのではなく、現実の体制の中に上手く組み込まれながら、運動を展開するわけです。もちろんそれはBLM運動に限ったことではありません。しかし他方で、それはどうなんだろうとか、BLMの代表者たちが大きな家を購入したらしいが結局金儲けか、消費主義か、という批判が出てしまうという現実が存在します。たとえば彼らが大きな家を買ったとして、それはひょっとしてコミュニティの安全な居場所を確保するためであって、自分が豪邸に住むためではないのではないか、とも思うのですが……。

いずれにせよ、暴力の尖鋭化を回避して継続的に活動や運動を展開するためには、現実のきわめて厳しい経済状況のもとでマネジメント能力を問われるというのが、いつの時代でも変わらず、非営利の活動の直面する課題なのだと思います。意外と長くなってしまいましたが、この後にご出席の先生方にぜひ一言ずつでもお願いできればと存じます。